

オーソリティとエッジの発見と先行研究

総合政策学部4年 遠藤 忍 (70701546 / s07154se@sfc.keio.ac.jp)

2つの研究領域

インタラクティブ・フォーラムという教育政策／英語タスクに関して、過去に行われている検索可能な研究は1件¹である。今夏筑波大学で実施された関東甲信越英語教育学会でシンポジウムが実施されたことを含めても、数件の研究しかない。となると、インタラクティブ・フォーラムを評価するためには、すでに研究されている教育の評価軸について先行研究を学ぶ必要がある。

そこで私は、第二言語習得研究の領域における「学習者の動機づけ」と「Focus on Form」という分野を援用することを考えている。前者は、活動を経た生徒が英語やコミュニケーション活動に対して楽しさを感じることで、より英会話や会話コミュニケーションの能力を高める、という仮説に基づき、その証拠として採用したい。後者は、簡単に言えば、コミュニケーション活動のなかで文法の形式を身につけていく指導法である。ここに見られる教師のコミュニケーション方略が、生徒間での会話においても見られる可能性があり、これを生徒の会話の談話分析の指標に援用できると考えている。

オーソリティとエッジは誰だ

さて、そのオーソリティとエッジはだれか、という件であるが、幸いにも、過去に研究会でいくつかの論文を読んだこともあり、双方の領域においてオーソリティとエッジは予測がついている。

学習者の動機づけ理論

- ・ Edward Deci & Richard Ryan (オーソリティ)

米ロチェスター大学で「自己決定理論(Self-Determination Theory)」の大家。彼らの動機づけ理論は広く心理学において捉えられてきた。第二言語習得研究や外国語教育の文脈で盛んに扱われているが、彼らはそれを想定している訳ではない。

- ・ 廣森友人 (エッジ)

立命館大学経営学部にも所属、専門は英語教育と教育心理学。論文の多くは動機づけに関する研究で、おもに大学英語教育学会や全国語学教育学会の投稿論文、雑誌『英語教育』での執筆が目立つ。

Focus on Form

- ・ Micheal Long (オーソリティ)

メリーランド大学の教授。Focus on Formの最初の提唱者であり、1991年に提唱した。

- ・ Rod Ellis (オーソリティでありエッジ?)

ニュージーランド・オークランド国立大学の教授で、中間言語語用論が専門。外国語の学習者が話す中間言語(母語とネイティブレベルの中間)の語用分析を行っている。

- ・ 和泉伸一 (エッジ[のようで、日本ではオーソリティか])

上智大学外国語学部英語科准教授で、『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』(大修館書店)の著者。Focus on Formについては、雑誌『英語教育』にも執筆。

¹ 長澤 邦紘, 田邊 一男 (2001) 「Interactive English Forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その1)(その2)」『茨城大学教育学部紀要. 教育科学』50, pp.129-158

オーソリティとエッジの論文を読む

上記のオーソリティとエッジについて、文献をあたってみたところ、調査段階で入手可能であった文献は、以下の2点であった。

- ・ 廣森友人 (2005) 「外国語学習者の動機づけを高める3つの要因：全体傾向と個人差の観点から」、『大学英語教育学会紀要』 **41**, 37-50
- ・ R.Ellis, H.Basturkmen & S.Loewen (2002), Doing Focus-on-Form, *SYSTEM*, **30-4**, 419-432

前者は、動機づけに関するエッジの研究であり、後者はオーソリティ(?)によるFocus on Formの概要論文であるといえる。両領域とも、オーソリティとエッジの一方が欠けてしまったことは、時間的コストの面から労力を洩った本人の怠慢に他ならないことを付け加えておく。

廣森論文の内容

今回引用した廣森論文では、これまでの動機づけ研究が実際の教室活動への応用や動機づけを高める方略に対して十分な検討をしてこなかったことを背景に、Deci & Ryanの自己決定理論を理論的基盤として、「『英語学習者の動機づけが高まる上で、自己決定理論における3つの心理的欲求（自律性・有能性・関係性）はどのような働きをしているのかについて、全体傾向と個人差の観点から調査・分析する』」という目的で研究を行っている。先行研究としてNoelsという研究者をはじめとするグループの研究を取り上げており、その結果として、外国語学習者を動機づける要因として「有能感」と「自己決定感」の充足が重要である可能性があること、また研究の問題点として、学習が生起する文脈や他者・周囲の状況の検討がなされていない点と多様な学習者の存在を想起していない点を、それぞれ挙げている。「有能感」と「自己決定感」という結果については、Deci & Ryanの言う自己決定理論と合致している。自己決定理論においては、学習者の動機づけが高まる前提条件として、自律性・有能性・関係性の3つの心理的欲求が挙げられており、これらが満たされた結果、学習者は内発的に動機づけられるとしている。

廣森は、大学1年生180名を対象として、「英語学習における心理的欲求尺度」と「英語学習における動機づけ尺度」の2つの尺度を用いた質問紙調査を実施した。そして、各尺度の因子分析、尺度どうしの因果モデル分析、さらに「……動機づけ尺度」の結果から調査対象者を4つのクラスターに分けて実施したプロファイリング、という3つの段階の分析を行った。前者の「……心理的欲求尺度」は、前述の自己決定理論における3つの心理的欲求をもとに作成された。後者の「……動機づけ尺度」であるが、自己決定理論では、動機づけを「外発」「内発」という2項対立的に捉えるのではなく、動機づけを連続体をなすものとして捉えており、この研究では「無動機」「外的調整」「取り入的調整」「同一視的調整」「内発的動機づけ」という5つの下位尺度を採用している。

心理的欲求尺度に関する分析の結果、自律性・有能性・関係性の3つの因子は相関が高いと判明し、3つの要因は密接に関連し合っている可能性が示唆された。動機づけ尺度に関する分析の結果、隣接する概念間は強い正の相関が見られ、対極に位置する概念間は負の相関か無相関が示され、このことから、「自己決定理論における動機づけは、自己決定の程度に基づいて、……連続体を形成している」ことが確認された。

さて、3つの心理的欲求と、5つの動機づけタイプの因果関係であるが、分析の結果、「有能性と関係性の認知が動機づけの各タイプに対して強い影響を与えていた」ことが分かった。つまり、「個別学習が中心に進められる傾向にある英語の授業においてさえ、学習者は他者との関わりを重視し、更に周りに受け入れられたいと強く感じている」ということが示唆される。また、自律性の欲求については、それほど強い影響が確認されなかったが、有能性・関係性と自律性は密接に関連し合っていることから、重要な役割を果たしているとも言える。

以上、全体傾向に関する分析であったが、学習者は個人差を有するという観点から、廣森は動機づけ尺度をもとに学習者を4つのクラスターに分けた。第1クラスターは「同一視的調整」によって動機づ

けられた群、第2クラスターは「同一視的調整」と「外的調整」により動機づけられている群、第3クラスターは「外的調整」「無動機」が高い群、第4クラスターは「内発的動機づけ」「同一視的調整」が高い群である。それぞれのクラスターの学習者が回答した3つの心理的欲求の尺度をグラフにすると、第4>第1>第2>第3の順にグラフの位置が下になってくる。このことは、3つの心理的欲求が動機づけに与える役割は重要なものであるということが示された。

以上のことから、廣森は、1)「他者との関わりといった周りの学習者は教師との関係性には、注目する必要があると考えられる」、2)「有能間の認知は必要不可欠であることが示された」と結論づけている。その上で、最後には、実際の教授場面における活動への具体的示唆を述べている。

R.Ellis論文の内容

Ellis論文は、前述の通り、Focus on Form(以下、FonF)の概要を説明した論文である。まずEllisは、外国語教育においては、これまで言語学的シラバスに基づいた文法形式についての教授が行われてきたことを述べ、そうした教授法をFocus on Formsと呼んでいる。FonFは、F on Formsとは異なり、文法形式に対して注意を払いながらも、教授自体はコミュニケーションタスク（なんらかのやり取りを伴う課題）において行われるものである。Ellisによれば、FonFには計画的FonF[planned focus-on-form]と偶発的FonF[incidental focus-on-form]がある。前者は、コミュニケーションタスクのテーマ設定が、ある特定の文法形式を取り扱うために意図的に組まれているもので、同じ形式をやりとりの中で何度も練習できる反面、レッスンのすべてにおいて一つの形式しか注視できないという欠点がある。後者は、あるコミュニケーションタスクのなかで学習者が犯す誤りを広範に指摘していくもので、テーマを制限せず様々な形式を修正することができるが、それが必ずしも文法形式の修得を保證するわけではないという欠点がある。

Ellisは次に（そして以下に示す2者がEllis論文の中核なのであるが）、反応的FonF[reactive focus-on-form]と先制的FonF[pre-emptive focus-on-form]について解説している。反応的FonFは学習者の誤りに対して反応をしていくタイプのものであるが、先制的FonFは学習者の誤りがなくとも文法項目をトピックや談話に入れ込んでいくものである。

反応的FonFについては、2つの側面が指摘されている。一方は、交渉が意味的であるか形式的であるか、もう一方は、フィードバックが明示的であるか暗示的であるか、である。前者について、学習者の文法形式的誤りが、受け手の理解を妨げる場合は意味の明確化要求などの意味交渉を行うが、誤りが意味理解を妨げない場合は形式の修正をはかる方法がある。後者については、学習者が誤りを犯した場合、その誤りの部分を繰り返して本人に気付かせる暗示的な提示方法（言い直し[recast]）と誤りを文法用語等を用いて直接説明する明示的な方法があり、学習者の知識の有無に応じて使い分ける必要があることを示している。

先制的FonFについても、文法項目に関する事柄が、学習者から出されるか、教師側から提示するか、という2つの側面について述べている。学習者から提示された文法項目を扱っていると、学習者とその項目を補ったり修正したりする動機はかなり高まる一方、その他の学習者にとっては、そのやりとりの時間は不要なものになることがある。反面、教師から文法項目を提示することは、教師がコミュニケーションタスクの中で中心としていることを反映させることができる一方、その項目は教師が予測したものであり、学習者の実態と合わないことが考えられる。

これらの、FonFの側面を提示した上で、Ellisは、どのようなタイプのFonFを扱うかは状況によって異なり、また状況によってそれぞれのタイプに良い点も悪い点も存在していることを述べている。また結論には、FonFについて未だに解決されていない問題点を挙げている。それらの問題点はほとんど、すでに述べたようないくつかの側面のうち「どちらがよいか」というものである。

両者の論文を読んで分かったこと

両者の論文から分かったことをまとめれば、廣森論文からは、動機づけを高める要因としては関係性と有能性の欲求を充足させることが重要そうである、ということ、Ellis論文からは、FonFには様々なタイプがあるが、少なくとも英語インタラクティブフォーラムの生徒間での談話で発生しそうなのは教師的なものでなく会話的なものであろう、ということがそれぞれ予測できた。また、両者を先行研究として捉えた際に、廣森論文は理論的背景に関する部分もさることながら、質問紙の内容と分析方法に関して、一定の知見を得ることができたと言えるものの、Ellis論文については、FonFが教師と学習者のやりとりのなかで文法形式を習得していくという側面が強いため、この論文ではなく、コミュニケーション方略を扱った別の論文を参照する必要があるということもわかった。